

# 崖の上で踊る

石持浅海

第四回

## 第二章 キーパーソンの死（承前）

「明後日だ」

吉崎が宣言するよう<sup>よ</sup>に言<sup>い</sup>った。

「五月五日の朝、我々は中道と西山を殺害する。計画どおりに」

「その計画では」瞳が後を引き取る。「西山殺しにも一橋さんが活躍する予定だったけど、練り直さなきゃね」

瞳は仲間たちをゆっくりと見回した。雨森、千里、沙月、絵麻が西山班だ。

「基本路線は、変えなくていいと思う」

代表して雨森が答える。「ふえき 笛木の携帯で西山を呼び出して、ここで殺すことは」

瞳が小さく首を傾げる。かし

「顔見知りの一橋さんが出迎えてこそ、警戒心を解けるんじゃないのかな？」

雨森が同じくらい小さな動作でうなずいた。

「それが最も楽なやり方だと思う。でも、そうしなければ殺せないというものでもない。たとえばけど、西山を呼び出すメールに『食堂で待っている』と書いておけば、西山は玄関からまっすぐこちらに来るだろう。食堂で一橋さんの死体を発見したら、やっぱりパニックに陥る。そのうえで襲いかかればいい」

「なるほど」吉崎が腕組みした。「二階まで連れて行って、笛木の死体を見せる手間すら省けるわけだ」

「ちよっと待って」

千里が顔を上げていた。「それまで、一橋さんはこのまま？」

雨森は優しげな顔を千里に向けた。大丈夫、わかっているからと。「そうだね。そこで提案だ。僕は今、仲間の死体を利用するという非人道的な提案をしたわけだけど、必ずしも一橋さんをそのまま放置する必要はないと考えている。ひとまず部屋のベッドに寝かせておいて、決行直前にまた食堂に戻すというのはどうだろう」

少しの沈黙。誰もが、どう返事をするか考えている。いや、それは正確ではないか。返事は賛成しかない。すぐに返事をしないのは、死んでしまった一橋のことを考えてあげられなかった自分が恥ずかしいからだ。少なくとも、絵麻はそうだ。自覚してしまった以上、返事をしなければならぬ。絵麻は率先して口を開いた。

「そうしようよ。このままにしておくんじゃ、一橋さんに申し訳ない」

「そうだな」吉崎がため息交じりに言った。「我々は、五日の朝まで、ここにいなければならない。どうしても食堂を使うことになるから、ずっと一橋さんにいられても、困る」

ひどいことを言っているようだけれど、誰も責めなかった。吉崎の口調と表情が、一橋を悼むものだったからだ。

「わたしも賛成します」亜麻音が追従した。「現在の気温でどれだけ腐敗が進むかわかりませんが、少なくとも個室に安置した方が、影響が少ないと思います」

「で、でも」菊野が戸惑ったような声を出した。「現場保存は……」  
「ちょっと、菊野さん」瞳が大げさに天を仰いだ。「まだ警察を呼ぶつもりなの？ 笛木と同じ場所で亡くなっている以上、一橋さんも現場保存はあり得ないよ。むしろ、徹底的に証拠隠滅しなきゃならない。それとも菊野さんは、警察に捕まりたいの？」

菊野の身体からだがぶるりと震えた。「そんなわけ、ない」

「瞳さんの言うとおりでよ」雨森が補足した。「笛木の現場はもちろん、僕たちがこの保養所にいた形跡は、完全に消さなければならぬ。といっても、ベッドで寝たりシャワーを浴びたりしたら、どうしても髪の毛が落ちたりする。証拠隠滅のためには、保養所ごと燃やすしかないと考えている」

「殺人の次は放火か」吉崎がため息をついた。「逮捕されたら、人生終了だな。それほどの重罪だ」

「俺たちにとっては、正義だけどね」

江角えすみが鼻息を荒くした。「話を戻そう。俺も、一橋さんに休んでもらうのに賛成だ。亜麻音さんは腐敗のことを気にしてたけど、俺は一橋さんを見えないようにした方が、計画に集中できると思うからだ」

「わたしも賛成だけど」沙月が宙を睨にらんだ。「死後硬直の問題があるね。今は亡くなったばかりだから、動かせると思う。でもベッドに一日半寝かしておいたら、身体が伸びた状態で硬直する。そうしたら、もう今の姿勢に戻せない」

「それはいいんじゃないかな」すぐさま雨森が答える。「西山が来る前に、食堂の床に、うつぶせの状態じょうたいで寝かせておけばいい。アイスピックはそのままにしておきたいからね。部屋のベッドに寝かせる

ときもうつぶせだし、食堂の床も同じ姿勢になる」

「あつ、そうか」

沙月が納得顔になった。

納得したのは絵麻も同様だけれど、同時に感心もしていた。よくもまあ、次々とアイデアが出てくるものだ。

アイデアだけではない。その前段階、提起すべき問題を見つけ出し、解決策を考える。雨森の頭脳は、自然とそういうことができるのだろう。彼もまた、フウジンWPIの被害者だ。つまり偏頭痛に悩まされている一人。それでも頭は、絵麻や沙月より、ずっと回転している。元々の能力差なのだろうか。

絵麻は頭を振った。いけない。一人で自虐的になっている場合ではない。

「反対意見もないことだし、さつさと実行に移そうよ。死後硬直が始まる前に」

「そうだな」吉崎が立ち上がる。「男が四人もいるんだから、一橋さん一人くらい運べる」

沙月も席を立った。「じゃあ、管理人室から合鍵を取ってくるよ」歩きだそうとする沙月を、雨森が止めた。「待って。一人で動かない方がいい。誰かと一緒に行って。そうだな、さつきと違うグループの誰かと」

雨森はテーブルの周囲を見回した。

「千里さんと亜麻音さん。一緒に行ってくれるかな」

千里がのろのろと立ち上がる。「いいよ」

「わかりました」亜麻音が、こちらは機敏な動作で席を立つ。すぐに椅子を元の位置に戻した。

沙月が苦笑する。「慎重ね」

それでも雨森の意見に反対するつもりはないようだ。女性三人が連れ立って食堂を出た。

「じゃあ、我々も動こう」

吉崎が一橋に歩み寄る。テーブルに突っ伏した頭部と左肩に手を当てて、ゆっくりと起こした。今まで隠れていた顔が晒された。

一橋は、苦悶くもんの表情を浮かべていなかった。目を閉じて、眠ったままの顔。自分が死んだことにすら気づいていない顔。

吉崎と菊野が両脇を抱えて、椅子ごと後ろに下げた。雨森と江角が片脚ずつ抱える。

「絵麻さん。頭を支えてくれ」

「わかった」

絵麻は言われたとおりにした。必然的に一橋の死に顔を間近で見ることになるわけだけれど、恐怖や嫌悪は感じない。これもまた、笛木殺害の影響だろうか。

「いくぞ。せえのっ」

掛け声と共に一橋を抱え上げる。一橋は少し太っている。体重はどのくらいだろうか。七十キログラム、下手をすると八十キログラムはあるかもしれない。男四人で均等に負担するとして、一人二十キログラム。持てない重さではなくても、十分でない体勢だと、それなりの負荷はかかるだろう。

それでも男性四人は、淡々と一橋の身体を運んでいく。脚が先だ。頭を支えている絵麻は最後尾からついていく。階段を上がり、十号室に向かって進む。十号室では、沙月たちが合鍵を使ってドアを開けたところだった。狭い出入口をなんとか通って、ベッドの脇に立つ。

「うつぶせに寝かせよう。そつとだ」

今まで仰向けに運んでいたから、身体を半回転させるのは、けっこう大変だった。無事に一橋をベッドに寝かせ終えたときには、男性陣の顔は一樣に赤くなっていた。

「よし、戻ろう」

やや息を乱しながら、吉崎が号令をかけた。きびすを返しかけた動きが止まる。その視線は、ベッド脇に立つ雨森に注がれていた。

雨森は、一橋に向かって両手を合わせていた。

慌あわてて絵麻も両手を合わせた。全員ならが倏あわう。しばらく、そのまま

動かなかった。

——一橋さん。

絵麻は目を閉じて、心の中で死者に語りかけた。

一橋さん。あなたが誰になぜ殺されたのか、それはわからない。

でも、あなたの遺志は継ぐよ。あなたを会社から追い出した中道と

西山は、必ず地獄に送ってみせるから。

目を開けて、そっと仲間の様子を見る。誰もが目を閉じていた。

みんな、心の中で一橋と話をしているのだろうか——犯人も。

吉崎が手を下ろした。「行こう」

九人がぞろぞろと階段を下りる。沙月、千里、亜麻音の三人が管理人室に合鍵を返しに行つて、少し遅れて食堂に戻ってきた。

また全員が同じ席に座る。誰も口を開かなかった。ひとつの行動を終えて次の行動に移るまでの、わずかな隙間。

絵麻も黙っていた。どうせ口火を切るのは、吉崎だ。そう思っていたら、案の定、吉崎の低音が響いた。

「我々は決めなければならない」

「決める？」江角が聞きとがめた。「何を？」

「今から取るべき行動だよ」吉崎は江角というより全員に対して答えた。

「二択だ。一橋さんの死について考えるか、夕食にするかだ。もう



七時を過ぎている。晩飯には、決して早くないと思うんだが」

確かに、夕食の支度をするために、午後六時半に集合すること  
していたのだ。

「みんな、食べられるの？」

瞳が尋ねた。仲間の死を目の当たりまにして、食欲はあるかという  
質問だ。

「食べられるよ」 雨森が答えた。「味はわからないかもしれないけど、  
空腹は感じてる」

絵麻も自分の胃に手を当てる。午後は笛木殺害のため、間食どこ  
ろではなかった。確かに空腹感があつた。

「そんなところね」

瞳が納得したようにうなづく。自分も同じ意見なのだろう。他の  
メンバーの意見を聞かずに立ち上がった。「簡単に作れるものがあれ  
ばいいんだけど」

腰を浮かせかけた男性陣を制して、女性五人がキッチンに向かう。  
メンバーは完全に同格だし、今どき料理が女性の仕事などと言うつ  
もりもない。あえて理由をつけるならば、男性陣は大変な思いをし  
て一橋の死体を運んでくれたからだろう。絵麻も頭を支える形で運  
ぶのに協力したけれど、負荷は男性陣と比べるべくもない。

カウンター脇からキッチンに入る。

「今からご飯を炊くのは、時間がかかるね」

独り言のように言いながら、千里が大量に購入した食材に向かった。レジ袋から台の上に広げる。一キログラム入りのパスタが目に入った。

「アスパラとベーコンも買ってあるね。簡単にパスタにしようか」

「レタスもサラダにしちゃおう」

あちこちを漁<sup>あさ</sup>ったら、乾燥ニンニクと鷹<sup>たか</sup>の爪が出てきた。オリーブオイルも。これなら、パスタはペペロンチーノに仕立てられる。

沙月と亜麻音が調理器具を探して出していく。包丁。まな板。パスタを茹<sup>ゆ</sup>でる大鍋。フライパン。ボウル。

大鍋に水を張ってガスレンジにかける。お湯が沸くまでの間にレタスを切<sup>で</sup>って出来合<sup>できあ</sup>いのドレッシングをかける。ベーコンとアスパラガスのカットする。

「アスパラって、下茹でするんだっけ」

「パスタと一緒に放り込んじゃえばいいよ。五、六分で十分。パスタは何ミリだっけ」

「えっと」袋の表示を確認する。「一・七ミリ」

「じゃあ、茹で時間は八分くらいかな。アスパラは、少し前に取りだそう」

大学生の亜麻音は料理に慣れていないようだったが、瞳と沙月は

主婦経験者だ。絵麻と千里は一人暮らしをしているから、料理は毎日やっている。これだけのメンバーがいてメニューが簡単だから、あつという間に九人分の料理が仕上がった。絵麻は手を動かしながらそれとなく女性陣の行動を監視していたけれど、不自然な行動を取ったメンバーはいなかった。雨森が心配していたように、料理に一服盛られたりもしていない。

「サンキュ」

テーブルに出された料理を見て、雨森が礼を言った。

「なんの。後片付けをしてくれればいいよ」

「それは、任せてくれ」

意外にも、江角が即答した。そういえば江角は、一人息子を亡くした後、奥さんとうまくいかなくなって離婚したのだ。現在は一人暮らしのはずだから、毎日食事を作ったり後片付けしたりしているのだろう。

ペットボトルの緑茶をグラスに注いで、一人少ない夕食が始まった。

食事中は、誰も言葉を発しなかった。黙々とパスタをフォークに巻きつけ、レタスを口に運んでいた。絵麻もだ。雨森は味がわからないかもしれないと言っていたけれど、意外とおいしく食べられた。殺人の後で仲間の死に遭遇したわりには、精神が正常を保っている

のが、我ながら不思議だった。いや、正常ではないからこそ、おいしく食べられたのかもしれない。

味はわかる。しかし食事に集中していたとは、とてもいえなかった。頭の中では、一橋の死がぐるぐると回っていた。

なぜ、一橋が殺されたのか。

それも、仲間の手によって。

状況から考えて、一橋を殺したのは、ここにいる九人以外にはいない。単独なのか複数なのかはともかくとして、間違いなくここにいるのだ。

でも、動機がわからない。動機以前に、事件の全体像が見えない。見えないからこそ、犯人候補者たちを疑えない。疑心暗鬼にすらならない。つまり、事件について考えられていないということだ。偏頭痛が治まっている現在でも、自分が起こしたわけでもない殺人事件は、自分には荷が重いようだ。

元々が、サラリーマンが十分間で食べ終える、ランチセットのようなメニューだ。簡単に作った食事は、簡単に食べ終えられた。

今度は男性陣がキッチンに入って、調理器具と食器を洗ってくれた。お湯を沸かして、一杯立てのドリップコーヒーまで淹れてくれた。これまた四人が相互監視しているから、変なことはされていないだろう。

「やっ」

やはり吉崎が口火を切った。

「一橋さんの話に戻ろう。我々は、一橋さんを失っても計画を続けることを決めた。夕食も摂<sup>と</sup>った。事件について考えることに、もはや障害はない」

「そうかな」

またしても雨森が意義を唱えた。亜麻音が険しい顔で雨森を見る。雨森は亜麻音を見ずに、吉崎をじっと見つめた。

「吉崎さんの意見には、矛盾<sup>むじゆん</sup>があるかもしれない。僕たちは、中道と西山を殺すことを決めた。一人で行うことじゃない。チームプレイが必要だ。今までの僕たちには、それができたはずだ。でも、一橋さんが殺されてしまった。ここにいる誰かに」

雨森は吉崎から視線を外した。メンバー一人一人に視線を送る。

「吉崎さんは、『誰が』『なぜ』一橋さんを殺したか考えると言った。それは、お互いに疑い合うことを意味する。そんな精神状態のまま、チームプレイができるのかな」

「……………」

「一橋さんのことはいったん忘れて、本来の目的に集中するのも、一案だと思っただけだ」

亜麻音が険<sup>けむ</sup>しい顔をした。「ずいぶん、犯人をかばうんですね」

「別にかばってないよ」雨森は軽く片手を振った。「優先順位を考えているだけだ。僕にとつての最優先事項は、中道と西山を殺すことだ。だからさつきも、一橋さんの死が計画に与える影響について心配した。今もそうだ。一橋さんの事件について考えることが、作戦遂行に悪影響をもたらすのなら、止めなければならぬ」

雨森は再び吉崎に視線を固定した。「吉崎さんは、どう思う？」  
二秒ほどの間を置いて、吉崎が口を開いた。

「私は、考えるべきだと思う」

これ以上ないくらい、真剣な表情。吉崎は、雨森が真剣に考えたうえで異議を唱えていることを、理解している。だから自分も真摯しんしに対応しなければならない。それがわかっている。

「なぜなら、一橋さんを殺した奴が、計画の妨害を目的としている可能性があるからだ。犯人は、明後日の作戦内容を知っている。西山殺しに、一橋さんが重要な役割を果たすことも。最も効果的な妨害は、一橋さんを殺すこと。そう考えて実行したとしても、おかしくない」

吉崎が口を閉ざしても、雨森はすぐに返事をしなかった。他のメンバーに考える時間を与えているようにもみえた。

「吉崎さんに、賛成」

千里が小さな声で言った。「一橋さんは、仲間だよ。それなのに殺

した人がいる。仲間を裏切った人がいるのに、それを無視してチームプレイも何もないと思う」

「もし犯人がわかったら」江角が続く。「そいつさえ排除してしまえば、残るメンバーはみんな無実だ。元のようにチームプレイができる」

正論だ。とはいえ犯人をどんなふうにも排除するか具体的に考えると、心が重くなる。江角は深く考えずに発言したようだ。目はぎらぎらしていたが、妖しい光は放っていないかった。

「で、でも」菊野が瞬きを繰り返した。「どうやって犯人を突き止めるんだ？」

主体性のない反論に、瞳が仏頂面ぶつちやうめんになった。「それを、今から考えるんじゃないの」

亜麻音がうなづく。

「吉崎さんは、『誰が』『なぜ』一橋さんを殺したか考えようとおっしゃいました。最終目的は『誰が』の方ですが、わたしたちは警察じゃありません。現場検証で犯人の手がかりを見つけるのは、難しいと思います」

「肝心の一橋さんを、運び出しちゃったしね。今さら現場検証なんて、やりようがない」

これは沙月。亜麻音が眉を動かすことで同意を示した。

「そのとおりです。ですからわたしたちが考えるべきは『なぜ』の方だと思えます。犯人は、なぜ、仲間である一橋さんを殺したのかしかも、このタイミングで。そこが手がかりにならないでしょうか」

全員の合意を取る前に、強引に話を進めた。おそらくは、雨森に話の腰を折られるのを警戒しているのだろう。

江角が宙を睨んだ。「吉崎さんは、犯人の目的は計画の妨害だと言ったな」

「断定はしてないよ」吉崎が苦笑する。「可能性があると云っただけだ」

「ということは、この中に裏切り者がいるわけだ」

吉崎の訂正を聞き流して、江角は続ける。「裏切り者、つまりフウジンブレード側の人間だ——誰だ？」

「何言ってるの」瞳が冷たく答える。「フウジンブレードの社員は、一橋さんじゃない。それも、元。あえて付け加えるなら千里さんの弟さんも元社員だったけど、フウジンブレードに使い捨てられた。下手をすれば、わたしたちよりも憎しみは強い」

瞳は、メンバーにフウジンブレードの味方などいえないと言いたいのだ。

雨森も首肯した。



「それに計画の妨害をするなら、笛木殺しも妨害するだろうな。でも、ここにいる全員が、一致団結して笛木殺しを実行した」

しかし江角は動揺しなかった。

「笛木だけは殺したかったのかもしれない」

「笛木個人を恨んでいたのは、一橋さんだよ」

瞳がびしゃりと言って、さすがに江角がのけぞった。瞳がたたみかける。

「江角さん、雨森さん、沙月さん、絵麻さんはフウジンWP1の被害者だから、会社そのものを恨んでいる。弟さんを亡くした千里さんも、お父さんを亡くした菊野くんも同じ。夫をダメにされたわたしも、その一員ね。吉崎さんと亜麻音さんは社会正義のために参加しているから、笛木一人だけを殺す意味がない」

「あら」沙月が冷笑した。「犯人がいなくなっちゃったね」

「笛木だけ殺したい人間に限定すればね」

雨森が補足した。「裏切り者という観点からいえば、決してフウジンブレード側の人間である必要はない。たとえば、原告団のうちの一人が、みんなに内緒でフウジンブレードと和解している可能性もある。もしそうなら、そいつは殺害に反対する立場になる。だって、経営幹部が殺されてしまえば、和解金をもらえなくなる心配があるからね」

雨森が口を閉ざすと、メンバーたちの視線が動いた。原告団とは、フウジンWP1の被害者を意味する。つまり江角、雨森、沙月、そして絵麻だ。

「俺は、和解なんてしてないぞ！」

江角が大声を出した。侮辱おじよくされたと感じているのか、こめかみに青筋が浮いている。

「わたしもだよ」

沙月が言い、絵麻も追隨した。雨森が満足そうにうなずく。

「僕もだ。そもそも殺す必要がなくなれば、ここに来ないだろう。計画を妨害しに来たのなら、笛木殺害も防がなければならない。この場にいる以上、笛木を殺してしまえば、共犯になってしまうからね。和解金どころじゃなくなる。つまり、原告団が裏切ったわけではなさそうだ」

「ちよっと待ってよ！」

瞳がこれまた大声を出した。「そんなこと言ったら、わたしか千里さんか菊野くんになっちゃうじゃない」

とうてい納得できないというふうふうに、頬ほおを膨ふくらませる。そんな瞳に、雨森は掌てのひらを下にして小さく上下させた。まあまあと抑える仕事だ。

「今のはひとつの例に過ぎない。原告団の一人が和解したという、

わずかな可能性を言ってみただけだ。それが否定されたら、自動的に犯人じゃなくなるわけじゃないよ」

「じゃあ、なんなのよ」

「たとえば」雨森はちらりとリーダー格の二人を見た。「吉崎さんと亜麻音さんは義侠心ぎせうしんから手伝ってくれたけど、面倒くさくなつたとか」

疑われた吉崎は、怒らなかつた。それどころか、笑みさえ浮かべていた。

「たつた今雨森さんが指摘したことを、そのまま返させてもらおう。それだったら、ここには来ないだろうね。笛木を殺しもしない。私は、実行犯だよ。他の誰よりも逃げ場がない」

隣で亜麻音が大きくうなずいた。反論された雨森もまた、目を細めて同意を示した。

「そう思う。もちろんこの反論は、瞳さんたちにも当てはまる。裏切りだと、笛木を殺した後に妨害するという行動に説明がつかないんだ。だったら、ちょっと見方を変えてみようか。一橋さん殺しは、裏切りによるものではないと」

「裏切りじゃない？」千里が訝いぶかしげに眉をひそめた。「仲間を殺したのに？」

雨森は答えず、仲間全員を見た。少しの間の後、吉崎が答えた。

「怨恨ってことがあるな。フウジンブレードと関係なく、犯人が一橋さんを憎んでいた可能性。一橋さんが眠剤を飲んで熟睡した今こそ最高のチャンスだと思って、殺害に及んだ」

「うん」的確な答えに、雨森が満足そうな顔をした。「この中に裏切り者が交じっていると考えるより、よっぽど自然だと思う」

「怨恨……」

絵麻は繰り返した。思いつきもしなかった可能性だった。

なぜなら、自分たちは同じ目的を共有した仲間だったからだ。計画を立案するときも、準備するときも、そして決行の瞬間にも、自分たちは共に行動していた。もちろん意見を戦わせることはあったけれど、険悪になったことは一度もなかった。そんなメンバーなのに、誰かが誰かを殺したいほど恨んでいたと聞かされても、納得できない。

「ありえるね」絵麻の心情をよそに、沙月がコメントした。「なんだかんだいっても、ニュースに出てくる殺人事件は、ほとんどが怨恨かお金がらみだから。一橋さんの事件がそうであってもおかしくない。ただ——」

沙月はコーヒーをひと口飲んだ。

「それが動機なら、誰かを特定するのは無理だね。心内の問題だから」

吉崎が肩をすくめた。反論できない、といったふうに。

その様子を見て、思いつくことがあった。絵麻たちは、フウジンブレードに強い恨みを持って行動に移した。一方吉崎と亜麻音は、社会正義を実現するために合流している。恨みが行動原理でない以上、一橋に対しても恨む理由がない。つまり自分たちは犯人ではない。そう言いたかったのではないだろうか。

しかし沙月は、心の中の問題だと、ひとまとめにしてしまった。これでは、いくら口先で怨恨など抱いていないと主張しても、説得力を持たない。当てが外れた失望が、吉崎にあのような仕草を取らせた。

「沙月さんの言うとおりでな」雨森がちらりと吉崎を見て言った。

「僕たちは打ち合わせの度たびに集まっていたわけだけれど、犯人と一橋さんが、二人きりで会っていなかったとは言いきれない。警察なら地道な捜査で証拠を見つけられても、僕たちにはそんな能力も時間的余裕もない」

雨森が言葉を切ると、食堂に沈黙が落ちた。

犯行は裏切り、あるいは変節によるものではない。怨恨が動機なら、見つけようがない。それでは、犯人を特定するなど絶望的ではないか。

絵麻はこっそりメンバーの様子を窺うかがった。誰もが、困った顔をし

ている。議論が行き詰まったことに対する困惑か、あるいは絵麻のように、犯人特定など不可能と理解した失望なのか。

けれど犯人は、間違はなくこの中にいる。犯人は、この膠着状態こうちやくを喜んでることだろう。困った顔を装って、内心を隠している。

「まいったな」雨森が沈黙を破った。頭を搔かく。「考えるネタが尽きてしまった。これでは疑心暗鬼のまま決行しなくちゃいけない」

だから、議論などしなければよかったのに——そこまでは口に出さなかったけれど、雨森が心配していたのは、まさしく現在の状況だった。

心配は的中したわけだ。自分たちは、決行どころか、明後日の朝までどう顔をつきあわせていいかもわからなくなった。

犯人捜しを主張したのは吉崎だ。もちろん彼にも言い分はある。しかし議論が止まってしまった以上、吉崎は雨森の非難を覚悟しなければならぬ。かといって打開できる案も持ち合わせていないようだ。彼もまた難しい表情を作って動揺を隠すしかない。

しかし吉崎は、いつまでも追い詰められてはいなかった。突然目を見開いた。「そうか……」

全員の視線が吉崎に集中する。

「どうしたの？」

代表して瞳が尋ねた。吉崎はすぐに返事をせず、ほんの少しの間考えをまとめるように宙を睨み、すぐに視線を瞳に向ける。

「私は勘違いをしていたかもしれない」

そんなことを言いだした。意味不明だ。しかし意味を問いただす前に、吉崎は話を続けた。

「私は一橋さん殺しが、我々の計画を妨害する目的でなされたものだと考えた。断定はしなかったけれど、江角さんが指摘したように、裏切り者がこの場にいる可能性を考えた。けれど、そもそもこの考え自体が間違っていた気がする」

「っていうと？」裏切り者説を最も熱く語っていた江角が訊き返す。吉崎はさらに目を大きくした。

「犯人は、計画を妨害するつもりで一橋さんを殺したわけじゃない。その可能性に気がついたんだ」

「怨恨のことなら、もう話したわよ」

瞳が口を挟んだが、吉崎は瞳が言い終える前から首を振っていた。「怨恨だとしても、個人的な怨恨じゃない。もっと早く気づくべきだった。仲間たちを裏切らず、怨恨による犯行が成立する可能性に」

吉崎は、宣言するように言葉を続けた。

「我々は、標的として中道、西山、笛木の三人を選んだ。でも犯人

は、標的は四人と•••考えていたんじゃないのか」

ひゅっ、と息を呑む音が響いた。菊野の喉が立てた音だ。絵麻と  
同じ年の青年は、顔を引きつらせながら言った。

「そうか。一橋さんはフウジンブレードの社員……」

「そういうことだ」吉崎の口調は、もはや裁判官のそれだった。

「もちろん一橋さんは会社の中で筋を通そうとして、結果的に会社  
を追われた。だから我々の仲間になってくれたわけだけど、受け  
入れたメンバーの誰か一人が、こう思った可能性はないのか。しよ  
せん、敵側の人間だと。笛木殺害までは、一橋さんの力がどうして  
も必要だったから、手出ししなかった。けれど、笛木を殺してしま  
えば用済みだ。もちろん西山殺しにも活躍してもらおう計画だった。

それにしたって、雨森さんが言ったように、必ずしも必要ではない。  
一人きりで熟睡しているという絶好の機会を逃さず、殺したんじや  
ないのか。裏切って仲間を殺したのではなく、標的の一人として始  
末するために。裏切りどころか、我々のためにやった感覚なのかも  
しれない」

「そ、そんな」千里がつかえながら言った。「仲間なのに」

意味のない反論だった。吉崎は、犯人は一橋を仲間と見なしてい  
なかったと言っているのだから。自覚があるのか、千里はそれ以上  
反論を続けられなかった。



瞳が唖った。「なるほどね。あり得る話だわ」

「だとしたら」巫麻音が両眼から異様な光を放ちながら言った。

「先ほど雨森さんが心配されていたことが解消されますね。犯人が仲間殺しをしたのではなくて、共通の敵を始末しただけ。それならば、裏切りではないから、中道と西山殺しには、なんの影響も与えません。そうじゃないですか？」

勝ち誇った口調だった。見下ろすように雨森に視線を送っている。

一方の雨森は、辛そうな表情をしていた。彼らしくない逡巡しゆんじゆんの後、口を開いた。

「吉崎さんの説には、説得力がある。実際に、そうなのかもしれない。でも、だからといって一橋さんを殺した人間を裏切り者ではないと決めつけるには、抵抗がある。僕にとっては、やっぱり一橋さんは、仲間だ」

他のメンバーから非難を受ける覚悟での発言だった。

表立って雨森を非難する発言は出なかった。代わりにあれだけ裏切り者説を支持していた江角が、肩を叩くように話しかけた。

「雨森さんの気持ちはわかるけど、問題は雨森さんがどう考えたかじゃなくて、犯人がどう考えたかだ。犯人に、他のメンバーをどうこうするつもりがないのなら、それでいいじゃないか」

菊野もうんうんとうなずく。「吉崎さんの説が正しければ、犯人は

中道殺しにも全力を尽くしてくれるだろう。チームプレイに支障はないと思う」

「結局」瞳のコメントはため息交じりだった。「一橋さんは、フウジンブレードという業わざから逃れられなかった。そういうことなのかな。だとすると、犯人捜しには意味がないね」

「そうかも」沙月も全面賛成の顔だった。「要は、中道と西山をきちんと殺せばいいわけだし」

千里はゆるゆると頭を振った。「そういうことなのかな」

観念したような口調。一橋を亡くした弟に重ね合わせていたようだった彼女も、同意せざるを得ないようだった。

瞳がこちらを見た。「絵麻さんは？」

いきなり指名されて、たじろぐ。でも考えてみれば、この場で意思表示をしていないのは自分だけだ。

どうだろう。自分は、一橋の死についてどう考えているのか。

吉崎の説には説得力があった。雨森ですら、認めざるを得なかったほどに。それが真実だとして、自分は賛同するのか。

生前の一橋を思い出す。最初に会ったとき、一橋は身構みがまえていた。元フウジンブレード社員として、自分たちがどんな反応をするか、想像できなかったからだ。

自分たちもまた、身構えていた。吉崎が見つめてきた、フウジン

ブレードを退社した人間。どんな人間なのか。それ以上に、本当に自分たちの味方をしてくれるのか。

結果的に、双方の心配は杞憂きゆうだった。吉崎と亜麻音の尽力もあり、一橋はフウジンブレードへの復讐心ふくしゆうを共有する、貴重な仲間になった。はずだった。

それが、誤りだったというのか。少なくとも、メンバーの最低一人は、一橋を仲間と見なさなかったというのか。

しかしそれは、内面の話だ。個人的怨恨と同じで、他人が検証することはできない。加えて今問われているのは、その倫理的是非ではないのだ。一橋を敵として葬ほうむった人間と、チームプレイができるか否か。

全員の視線を受けながら、絵麻は口を開いた。

「犯人の行動は、正しいのかもしれない。中道と西山殺しに、最も積極的に行動してくれるのかもしれない。でも、やっぱり一橋さんは仲間だと思う。犯人がどう思おうと。だから犯人と無邪気むじやきにチームプレイはできない。そうするしかないのは、わかってるんだけど」

「オッケー」

吉崎が両手を広げた。

「雨森さんが言ったように、優先順位が最も高いのは、中道と西山

殺した。一橋さんを殺した犯人がそれを妨害しそうにないなら、ここの犯人捜しは無意味だ。それでいいかな？」

吉崎は、雨森と絵麻の反対意見を封殺しようとしている。危険なものを感じたけれど、具体的な反論は思いつかない。というか、彼の意見は正しいものと思えた。

誰からも反対が出ないのを確認して、吉崎はぼんと手を打った。

「じゃあ、今日の議論は終了しよう。後は、一橋さんの冥福めいふくを祈ればいい。私は、自分の部屋でそうさせてもらう」

そんなことを言いながら立ち上がった。キッチンに向かい、缶ビールを片手に戻ってきた。

「こいつをもらっていくよ。さすがに疲れた」

皆の反応を待たずに、吉崎は食堂から姿を消した。江角と菊野も吉崎に倣った。キッチンから缶ビールを取ってきたのだ。

「じゃあ、明日の朝」

「起きる時間は、指定しなくていいよね」

それぞれそんなことを言い残して、姿を消した。亜麻音も席を立った。アルコール類は持たず、食堂を出ていった。

「やれやれ」瞳は自分の右肩を揉もんだ。「とんでもない一日だったね。まあ、自業自得なんだけど」

わたしはアルコールはいいわ、と言って席を立った。千里は無言

で食堂を後にした。

沙月はキッチンに消えた後、赤ワインのボトルを右手に戻ってきた。左手には、ドライソーセージの袋。

「絵麻さん、一緒に飲まない？」

「えっ……」

飲めない方ではない。怒濤どとうの展開に気疲れしているのも確かだ。アルコールを欲する気持ちがないではないけれど、逆に飲んでもいいのか理性が不安視しているのも、また確かだ。

「いいですね」

疲労が理性を打ち倒して、そんな返事をしてしまった。沙月が目を三日月にした。「そうこなくちゃ」

同じフウジンWP1被害者として、沙月とは強い仲間意識がある。実際、被害者の会の会合の後、二人で飲みに行ったことも数多くある。だから沙月と飲むことに抵抗はなかった。

絵麻も立ち上がった。席で考え込んでいる雨森に声をかけた。

「お疲れさま」

雨森は少し疲れた、でも穏やかな微笑ほほえみを向けてきた。

「お疲れさま」

\* \* \*

吉崎は缶ビールを開栓すると、一気に半分飲んだ。

食堂で行われた一橋の死に関する議論にけりをつけて、一人で客室に戻った。あまり長居をすると、誰か——特に雨森——が効果的な反論を思いついてしまうかもしれないからだ。

あれでよかったのだ。

そんなふうを考える。雨森は優秀な人間だ。それはわかる。彼のような人間がメンバーにいてくれて、よかったと思う。

しかし、仕切るのは自分だ。雨森は、しょせん風力発電機の被害者に過ぎない。近くで小型の風車が回っていただけで体調を崩す、弱い人間だ。自分は違う。彼らを救う立場の人間だ。雨森に言い負かされるわけにはいかない。

苦し紛れに思いついた仮説だったけれど、実際に口に出してみたら、意外に説得力があった。というか、これこそ真実ではないかと思えるくらい。事実、誰も反論してこなかった。雨森でさえも。だったら、これが真実なのだ。そう断定しても、自分にはなんの不都合もない。

大学では、民間企業への就職ではなく、公務員試験を受験する道

を選んだ。純粹に、人の役に立ちたい。そう考えて公僕と呼ばれる職業を選んだのだ。そして公務員試験に無事パスして、市役所に勤務することになった。

結果的に、自分の読みは完全に間違っていた。勤務することになった市役所では、惰性<sup>だせい</sup>でやれる退屈な仕事が待っていた。上司や同僚たちと話をすると、市民のために働いているという意識を持っていることはわかった。それが職業上の誇りであることも。しかし彼らの目指しているのは、いかにして現状をスムーズに回すかだった。変えないことこそが、市民のため。それが共通認識だった。

吉崎が目指しているものは、違った。市民生活を飛躍的に改善しなかった。しかし職場の空気を読まずに大胆な改革案をぶち上げるほど子供ではなかった。同僚たちに交じって退屈な仕事を無表情でこなしながら、どうすれば自分の目標を達成できるかを考え続けた。そして出会ったのが、消費者保護運動だった。

調べれば調べるほど、世の中には悪が満ちていることがわかった。もちろん良心的な企業も多数存在する。しかし身内の論理に凝り固まって、消費者に不利益をもたらしてしまう企業は、もっと多かった。連中を退治することこそが、自分の望んでいた市民への奉仕だ。吉崎はそう結論づけた。

公務員が社会運動に参加するのは、危険を伴う。だから吉崎は、

自分の身分を極力気取られずに活動を続けていた。あらかじめ予想していたとおり、すぐに壁にぶつかった。いくら日本が法治国家とはいえ、法律は完璧ではない。現行法や訴訟制度では悪徳企業を罰することが難しいのだ。

だからといって、吉崎は簡単に投げ出したりはしなかった。公務員の身分を隠していることを幸いに、吉崎は次第に過激な活動に手を染めることになった。はっきりいえば、違法行為。時折新聞紙上を賑わす企業へのテロ事件。そのいくつかには、吉崎も関わっていた。でも逮捕されていない。その程度には、吉崎は有能だった。

そして、フウジンブレードだ。

風力発電機の被害者たちもまた、正攻法で戦おうとした。集団訴訟を起こしたのだ。バカな話だ。勝てるはずがない。しかし考えようによっては、今がチャンスだ。一審すら結審していない現状でことを起こせば、原告たちはむしろ容疑から遠くなる。吉崎は被害者の会に接近し、より恨みの深い面々を選び出した。そして耳元で囁いたのだ。殺せ、と。

今日、標的の一人、笛木を殺害することができた。誰も来るはずがない保養所に潜伏し、明後日残る二名の標的を殺害して解散する。そのはずだった。

ビールを飲む。



なぜ一橋が殺されたのか。その理由は、自分の仮説で説明できると思う。一橋は敵側の人間であり、標的の一人に過ぎないと犯人が考えた可能性。ほぼ正解だと思う。

では、誰なのか。

誰でもあり得ると考えている。最も過激な行動を起こしそうな江角から、大人しい絵麻まで、全員が容疑者だ。死んだ弟を一橋に重ね合わせ、何かと気にかけていた千里だつて怪しい。

唯一、犯人でないと断言できるのが、亜麻音だ。なぜなら彼女は、休憩時間、ずっと吉崎と一緒にいたからだ。

社会正義を実現させるために、殺人を犯す。今まで、おこな何度も行ってきたことだ。そして殺人を遂行したときは、いつも性的に興奮してしまう。自分だけの特殊な性癖だと思っていたけれど、どうやら違つたようだ。亜麻音もまた、悪人を駆除すると欲情した。笛木を殺したときもだ。休憩時間、前もって約束することもなく亜麻音は吉崎の部屋を訪れ、肌を合わせた。

いや、肌を合わせたなどという詩的なものではなかった。むさぼ貪るようなセックスというのが、正しい表現だ。隣室の江角に聞こえてしまふのではないかと心配になるような、激しい動き。行為を終えると亜麻音はシャワーを浴びて、集合時刻の十五分前に自室に戻つた。

現在の自分は、性的な興奮を覚えていない。なぜなら、自分が一

橋を殺したわけではないからだ。かといって恐怖に股間こかんが縮み上がったりもしていない。使おうと思えばすぐに使える状態にある。

それでも、さすがに亜麻音は来ないだろう。犯人は敵の一味と考えていたのかもしれないけれど、やはり一橋は仲間だ。仲間が死んだ直後に性行為せいけいに耽るふのは、いくらなんでも不謹慎ふきんしんに思える。まだ大学生で、常識的判断には未熟なところもある亜麻音だって、同じ考えだろう。もつとも、来たら来たで、失望はしないけれど。

——と。

ノックの音がした。

おいおい。本当に？

吉崎は立ち上がりながら、股間の熱が上がっていくのを感じていた。玄関ドアに向かう。

ドアを、開けた。

〈つづく〉